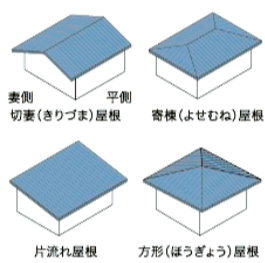




縄文時代前期の竊穴住居

考古学の教えるところによると、日本列島に人類が登場したのは今から三万年以上も前のことである。水河期の寒さと戦いながらナウマン象を追っていた彼らの住居はどのようなものであったろうか。狩猟によって食料を得ていたいわゆる旧石器時代においては、人々は絶えず移動しながらの生活であった。そこでは住居も簡単に築き上げられるものでなければならなかった。現代の我々が、移動生活のための住居ということか

これまで竊穴住居は縄文時代以降の居住形態と考えられていて、旧石器時代は平地式に限られるとみなされてきた。ところが昭和六十一年、旧石器時代にも竊穴住居が存在する遺構が発見された。



空中にあるのに屋根というのなぜか。その語源については古来、さまざまの推測が加えられてきた。



叩き板と使い方

①粘土を焼成した「瓦」、②草の茎を積み重ねる「茅」、

ヤネの語源

- ・棟の作り方。
・屋根裏。
・隅の葺き始め。
・茅葺きの工法と用具(図示)
・屋根裏。

*参考文献 鹿島出版会 「屋根のはなし」 (木原伸雄)

日本列島に屋根が現われたころ



屋根裏

屋根の形態は、棟と屋根面の位置関係から二種類に分けられる。棟の両側にのみ屋根を傾斜させる「切り妻」と、四方方向に屋根面を傾ける「寄せ棟」である。ほかに「片流れ」と「方形」に分類できる。

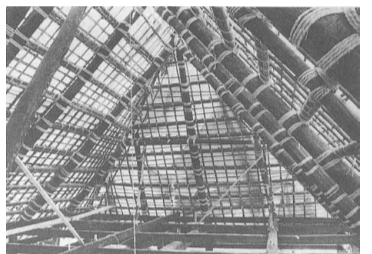
瓦屋根の一般的な勾配は五寸(27度)から六寸(32度)、茅葺きは矩勾配(45度)、檜皮、柿葺きは七寸(35度)が一般的とされる。日本の屋根は風土によって規定される部分が多かった。多量の降水は勾配屋根を生み、豊かな森林資源は木構造の軸部を生んだ。日本では「陸屋根」と「組積造」は生まれなかったし、その必要もなかった。屋根には必ず勾配をつけねばならなかったし、木造の架構を保護するために軒の出を深くする必要があった。

住まいの物語 14

~屋根のはなし~



たといえば、屋根と壁が分離する壁立て式住居、あるいは掘立柱建物。これはこれまで弥生時代の形式とみなされていたが、縄文時代の早い時期から存在したことが明らかになった。高床式の倉庫もすでに縄文時代に存在したと考えられる。



「屋根かご」の例

「屋根の形はどうして決まるか」住居は、基本的には厳しい自然環境から人間を守るシェルターである。世界中の大多数の住居が問題としていたのは、「雨」と「寒さ」である。この二つに対抗するためには、勾配の付いた屋根と、隙間のない壁体が必要である。

③樹皮を剥いで茸く「檜皮」、④薄い木の板を用いる柿(こけら)。これ以外は特殊例となる。屋根においては「勾配」も大きな意味を持つ。屋根勾配は、葺き材と葺き方によって定められる。水が浸透しやすいものほど、雨水を速やかに流下させるために急勾配にしなければならない。

- ①「ネ」という言葉は、羽根・岩根・眉根などのように基盤にしっかりと固着している様を表す。
②逆に「ネ」は峰・尾根・筑波根のように高いところを表すという見解もあり、ヤネは屋峯なのだとする。
③屋棟(ヤムネ)の省略型。
④音は同じだが屋・胸(ヤムネ)の省略型。
⑤屋の上(ヤノウエ)の省略型。
⑥ヤという言葉に、そもそも高いという意味がある。
⑦「いやさか」のイヤと同じく、重なるという意味。
⑧茅で内外を隔てるということから「草隔(カヤヘ)」が縮まったという説。

「義を見て為さざるは勇無きなり」
「過ぎたるは猶及ばざるがごとし」
「性相近し、習いは相遠し(習慣が人をつくる)」
「己の欲せざる所は人に施すこと勿れ」

第9回 オレンジフェスタ



自然派リフォームのマルコシが「安全」と「安心」の暮らしをサポート



5月16日(土) 午前10時~午後4時

(株)マルコシ本社1階~屋上(安佐北区落合4-1-7 ☎843-9981)

詳しくは特集版裏面をご覧ください。

社員一同、心を込めてお役に立たさせていただきます。ご来場を心よりお待ちしております。